

中学生の悩みの深刻さ，援助要請時に受けた援助，受けた援助の期待との一致，援助評価と学校適応の関連の検討

筑波大学大学院人間総合科学研究科 本田 真大

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 新井邦二郎・石隈 利紀

The Relationships between Perceived Problems, Received Support after Help-Seeking, Match between Expected and Received support, Evaluations of Help and School Adjustment in Junior High School Students

Masahiro Honda (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Kunijiro Arai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Toshinori Ishikuma (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the relationships between perceived problems, received support after help-seeking, match between expected and received support, evaluations of help and school adjustment. In total, 1,669 junior high school students were asked to complete a questionnaire. Pass analysis results for 231 students who had previously sought consultation concerning study and advancement issues indicate that the support received and the match between expected support and received support facilitated school adjustment through improved awareness of the perceived problem. Moreover, the pass analysis results for 327 students who had previously sought consultation concerning psychological, interpersonal or physical problems suggest that (1) perceived problems indirectly reduced school adjustment through a dependency on others, (2) received support indirectly facilitated school adjustment through improved awareness of the perceived problem and recognition of support from others, and (3) the match between expected support and received support indirectly reduced school adjustment through a dependency on others.

Key words: help-seeking behavior, received support, evaluations of help

問題と目的

中学生にとって、悩みを抱えることは学校での不適応に関与する重大な要因である。中学生は悩みを抱えるとさまざまな対処行動を行うと考えられるが、それらの一つとして、親、教師、友人といった周囲の他者に相談するという対処が挙げられる。半数以上の中学生は悩んだ際に周囲の他者に相談して

おり（石隈・小野瀬，1997）、このような対処が中学生の適応に与える影響を検討することは重要であると考えられる。

悩みを相談するという現象は援助要請行動として研究されている。援助要請行動は、「情動的または行動的問題を解決する目的でメンタルヘルスサービスや他のフォーマルまたはインフォーマルなサポート資源に援助を求めること」と定義される

(Srebnik, Cause, & Baydar, 1996)。本研究では先行研究を踏まえて、悩みを相談するという現象を援助要請行動の観点からとらえることとする。

援助要請行動が適応に与える影響に関する研究において、縦断的な研究からは、援助要請行動の有無や実行された量は12週間後 (Rickwood, 1995), 4～5年後 (Lieberman & Mullan, 1978), 6年後 (Trusty & Harris, 1999), 20年後 (Millman, 2001) の適応状態にほとんど関連がないことが一貫して報告されている。このように、援助要請行動の実行された量のみでは適応状態を十分に予測することはできないと考えられる。

援助要請行動後の過程について、本田・新井・石隈 (2006a, 2006b), Honda, Arai & Ishikuma (2006) は中学生が悩みを他者に相談するという現象に着目し、「援助評価」という概念を提唱している。援助評価は「援助を提供されたときやその後に行われる、他者から提供された援助が自分自身に与えた影響に対する認知的評価」と定義される。そして、「問題状況の改善」「対処の混乱」「他者からの支えの知覚」「他者への依存」という4つの信頼性・妥当性のある下位尺度から構成される援助評価尺度が作成されている (Appendix 1)。援助評価と適応との関連については、中学生を対象とした1ヶ月間の縦断的研究によってポジティブな評価 (「問題状況の改善」「他者からの支えの知覚」) はストレス反応を低め、学校生活享受感を高めること、ネガティブな評価 (「対処の混乱」「他者への依存」) はストレス反応を高め、学校生活享受感を低めることが示されている (本田・新井・石隈, 印刷中)。しかし、本田他 (印刷中) では援助要請時に受けた援助については検討されていないため、実際に受けた援助と援助評価のどちらがより適応に影響を与えるのかは明らかではない。さらに、「受け手の必要性 (ニーズ) と適合 (match) するサポートこそが効果的であり、逆に、必要性和適合しないサポートは効果を持たなかったり、ときには逆効果であったりする」というソーシャルサポートの「マッチング・モデル」の考えに基づけば (橋本, 2005), 受けた援助と援助要請者の期待した援助が一致している程度という要因も適応に影響を与えるであろう。また、悩みそのものも適応を悪化させる (本田他, 印刷中)。このように、援助評価の他にも様々な要因が援助要請行動後の適応に影響を与える可能性がある。

そこで本研究では、援助要請時に受けた援助と援助評価およびその他の要因が適応に与える影響を比較・検討することを目的とする。具体的には、中学生の悩みの深刻さ、援助要請時に受けた援助、受け

た援助と期待した援助の一致、援助評価と適応との関連を検討する。

方 法

調査対象者：関東の公立中学校4校に通う中学生1669名 (1年生男子322名, 女子283名, 2年生男子272名, 女子268名, 3年生男子268名, 女子252名, 不明4名, 平均年齢13.23±0.92歳)。

調査時期：2006年7月。

実施方法：個別記入方式の質問紙を用いた。クラス担任教師に調査を依頼し、学級活動の時間等を用いて質問紙を配布してもらい、集団で調査を実施した。

調査内容：フェイスシートで学年、年齢、性別が尋ねられ、続いて以下の質問への回答が求められた。質問紙のフェイスシートには上記の内容に加えて、質問すべてに対して拒否権があること、拒否しても不利益がないことを明記した。

(1) **中学入学後の相談経験の有無**：中学校入学後に、友人、先生、親 (保護者)、きょうだい、その他の人などに相談した経験の有無を尋ねた。2件法 (はい/いいえ) で回答が求められ、「はい」と答えた生徒に (2)～(6) への回答が求められた。

(2) **悩みの相談状況**：一番最近相談した場面を想起してもらうために、以下の4つが尋ねられた。①悩みの内容：学校心理学の5領域 (石隈, 1999) を参考に作成され、「勉強や成績など」「自分の性格など」「人間関係など」「進路など」「身体や健康など」「それ以外」から択一回答が求められた。②相談相手：石隈 (1999) の4種類のヘルパーを参考に、「親 (保護者)・きょうだい・家族」(役割的ヘルパー), 「学校の先生」(複合的ヘルパー), 「親しい友だち・先輩後輩」(ボランティア的ヘルパー), 「スクールカウンセラー・相談員」(専門的ヘルパー), 「その他の人」から択一回答が求められた。③悩みの深刻さ：「その悩みはあなたにとってどのくらい深刻な悩みでしたか? あてはまる数字一つに○をつけて下さい。」という指示のもと、「1: 深刻ではなかった」, 「2: 少し深刻だった」, 「3: 深刻だった」, 「4: かなり深刻だった」, 「5: 非常に深刻だった」で回答が求められた。④相談した時期：「その悩みを相談したのはどのくらい前のことですか? ○日, ○週間, ○ヶ月などで答えて下さい。」と指示し、「約__前」と書かれたスペースに記入するように求められた。

(3) **援助要請時に受けた援助**：既存の知覚されたサポート尺度 (岡安・嶋田・坂野, 1993), 実行され

たサポート尺度(尾見, 2002)を参考に, House (1981)の指摘する4種類のサポートの観点から項目を作成した。項目作成後, 選択された項目と元の分類枠との関連が適切であり, かつ選択された項目群がそれぞれの分類を代表しているという観点から, 心理学の専門家1名, 現職の教員3名によって内容的妥当性が確認された。最終的に28項目が用いられた。「あなたがその悩みを相談した時, 相談相手はあなたに以下のようなことを, 実際にどのくらいしてくれましたか? あてはまる数字一つに○をつけて下さい。」と教示し, 4件法(「1:まったくしてくれなかった」, 「2:あまりしてくれなかった」, 「3:ある程度してくれた」, 「4:十分してくれた」)で回答が求められた。

(4) 援助評価: 援助評価尺度(Honda et al., 2006; 本田他, 2006a, 2006b)を用いた(Appendix 1)。「あなたがその悩みを相談したときのことをふりかえってみて下さい。あなたがその悩みを相談したときやその後で, 次のことをどの程度思ったり考えたりしましたか? あてはまる数字一つに○をつけて下さい。」と教示し, 4件法(「1:あてはまらない」, 「2:ややあてはまらない」, 「3:ややあてはまる」, 「4:あてはまる」)で回答が求められた。

(5) 受けた援助と期待した援助の一致: 「自分がしてほしかったことと同じことを相手にしてもらった」「相手がしてくれたことは, 多すぎも少なすぎもせず, ちょうどいい量だった」という2項目によって測定した。援助評価尺度と同じ教示文であり, 4件法(「1:あてはまらない」, 「2:ややあてはまらない」, 「3:ややあてはまる」, 「4:あてはまる」)で尋ねられた。

(6) 学校適応: 水野(2007)による学校心理学的適応感尺度が用いられた。本尺度は, 「心理・身体領域」「進路領域」「学習領域」「社会領域」の4つの下位尺度により, 外的な適応感を測定する尺度であった。

結果と考察

中学校入学以降に相談した経験がある生徒は892名(1年生男子86名, 女子157名, 2年生男子102名, 女子194名, 3年生男子122名, 女子229名, 不明2名, 平均年齢12.29±1.65歳)であった。

(1) 援助要請時に受けた援助を測定する尺度の構成

援助要請時に受けた援助尺度について因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った。その結果, 固有値が1.00以上の因子が3因子抽出されたが, いずれの因子の間の因子間相関も.70前後であり, 非

常に高いと判断し, 因子数を3から順次減らした結果, 1因子構造を採用した。Cronbachの α 係数は $\alpha = .95$ であり, 高い信頼性が確認された(Table 1)。

(2) 悩みの深刻さ, 援助要請時に受けた援助, 受けた援助と期待した援助との一致, 援助評価と適応との関連

中学生の悩んだ経験に関する尺度を作成した石隈・小野瀬(1997)の因子分析の結果では, 学習と進路の悩みの項目は同一の因子に含まれており, 学習と進路の悩みは中学生の体験として同様であると考察されている。また, 本研究で使用した学校心理学的適応感尺度(水野, 2007)では, 心理領域と身体領域の適応感は同一の因子として構成されている。そこで本研究では, 学習・進路領域の悩みを相談した生徒と心理・社会・身体領域の悩みを相談した生徒ごとにパス解析を行った。なお, 学校適応との関連を検討するにあたり, 過去1ヶ月以内に相談した経験のある生徒のみを分析対象とした。分析対象となった生徒の悩みの内容と援助要請相手の内訳をTable 2に示した。

パス解析はすべて測定変数を用いて行った。第1水準に悩みの深刻さと受けた援助, 援助の期待との一致(2項目の合計得点)とし, これらの間に共変関係を設定した。第2水準には援助評価の4つの下位尺度を配置し, これら4つの変数の誤差間に共分散を仮定した。第3水準には学校適応として, 学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデルでは学校心理学的適応感尺度の「学習領域」と「進路領域」の合計得点, 心理・社会・身体領域の悩みの援助要請後のモデルでは「心理身体領域」と「社会領域」の合計得点を用いた。第1水準から第2, 第3水準の各変数にパスを設定し, 第2水準の各変数から第3水準の変数にパスを設定した。モデルに含まれる変数の記述統計量と変数間の単相関係数をTable 3, 4に示した。

学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデルの分析

本モデルの分析対象者は, 中学生231名(1年生男子29名, 女子33名, 2年生男子27名, 女子35名, 3年生男子44名, 女子63名, 平均年齢13.47±0.91歳)であった。分析の結果, 「悩みの深刻さ」から「対処の混乱」, 「他者への依存」に正の標準偏回帰係数が認められた。また, 「受けた援助」からは「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」に正, 「対処の混乱」に負の標準偏回帰係数が示された。「援助の期待との一致」は「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」, 「他者への依存」との間に正の標準偏回帰係数があることが明らかになった。

「学習・進路領域の学校適応感」に対しては、援助評価の「問題状況の改善」から有意な正の標準偏回帰係数が認められた (Fig. 1)。

以上の結果を考察する。まず、悩みの深刻さと「対処の混乱」, 「他者への依存」の関連について、悩みが深刻であるほど援助者の手に負えなくなり、良い援助ができなくなった結果、援助要請者も余計に対処方法に迷ったり、援助者の一生懸命に援助する姿勢がかえって援助要請者に「援助者に依存した」という評価をさせたりする可能性が考えられる。次に、援助要請時に受けた援助は援助評価の「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」と正の関連を示し、「対処の混乱」とは負の関連を示していた。この結果は、本研究では援助要請時に受けた良い援助を測定する項目を用いたためであると考

えられる。さらに、受けた援助と期待した援助が一致しているほど援助評価の「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」を高めることは、「マッチング・モデル」の考え方 (橋本, 2005) を支持するとと言える。しかし、期待と一致しているほど「他者への依存」も高められる可能性が示唆された。最後に、学習や進路の悩みを相談した生徒の「学習・進路領域の学校適応感」には、援助評価の「問題状況の改善」のみが関連していた。援助評価が適応と関連するという結果は本田他 (印刷中) と一致している。本研究では「問題状況の改善」のみが学校適応と関連していた。

心理・社会・身体領域の悩みの援助要請後のモデルの分析

本モデルの分析対象者は、中学生327名 (1年生

Table 1 援助要請時に受けた援助尺度因子分析 (最尤法, $N=844$)

	項目	<i>FI</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
情緒	24 あなたが失敗したことを一生けんめいはげましてくれた	.76	2.96	.97
道具	17 あなたが失敗したことに対して、あなたと一緒に行動して、助けてくれた	.75	2.92	.96
評価	9 あなたなりに努力したところに気づいて、それを言ってくれた	.74	2.90	.92
評価	22 あなたのしていることでいいところを言ってくれた	.73	2.94	.93
情緒	20 あなたのことをとても大切にしてくれた	.72	3.35	.83
情緒	7 あなたに起こったうれしいことを自分のことのように喜んでくれた	.72	3.01	.93
評価	26 あなたがしたことをほめてくれた	.71	3.04	.93
情緒	27 あなたのことを心配して、声をかけてくれた	.71	3.21	.90
評価	12 あなたがしていることで前よりも良くなったところを指摘してくれた	.71	2.84	.90
情報	25 あなたができることを考えた上でのアドバイスをしてくれた	.70	3.14	.86
評価	5 あなたががんばっていることを指摘してくれた	.69	3.01	.86
情緒	4 あなたが経験したいやな思いについてなくさめてくれた	.69	3.11	.91
道具	6 あなたが自分ひとりじゃできないことを手伝ってくれた	.69	3.15	.87
道具	3 あなたがどうしてよいか分からなくなったことを、手伝ってくれた	.68	3.15	.82
情緒	1 あなたが落ち込んでいると、元気づけてくれた	.66	3.29	.80
道具	13 あなたが悩んでいることを何とかするための機会 (チャンス) を与えてくれた	.64	2.77	.95
情報	11 あなたが自分の悩みとうまくつきあうために、どうしたらよいか教えてくれた	.63	2.95	.89
道具	21 あなたの悩みを小さくするために、周囲の環境や状況を変えてくれた	.63	2.67	.97
情報	14 あなたの悩みに関わる周囲の状況について教えてくれた。	.62	2.86	.91
評価	18 あなたのしていることについて改善するよう言ってくれた	.61	2.99	.89
情報	8 あなたの悩んでいることがうまくいくためのやり方を教えてくれた	.61	3.07	.84
情報	19 あなたにとって役に立つ情報をくれた	.61	3.17	.88
道具	10 あなたが必要としている物や場所を貸してくれた	.59	2.76	.96
情報	23 あなたのしたことが今後どうなるかという見通しを説明してくれた	.59	2.77	.93
情緒	16 あなたが悩みや不満をおちまけても、いやな顔をしないで聞いてくれた	.57	3.33	.85
道具	15 あなたの悩みを何とかするために、あなたの代わりに他の人に頼んでくれた	.56	2.38	.99
評価	28 あなたがしていることで直した方がよいところを言ってくれた	.55	3.05	.90
情報	2 あなたの悩みに対して、その人の意見を言ってくれた	.50	3.43	.70

注) 項目前の「情報」「情緒」「道具」「評価」は House (1981) のサポートの分類に基づいた項目作成時の分類を示した (例: 「情報」→「情報的サポート」)。

男子28名、女子83名、2年生男子29名、女子84名、3年生男子24名、女子79名、平均年齢13.24±0.92歳)であった。分析の結果、「悩みの深刻さ」から「対処の混乱」、「他者への依存」に正、「問題状況の

改善」、「心理・社会・身体領域の学校適応感」に負の標準偏回帰係数が得られた。「受けた援助」からは「問題状況の改善」、「他者からの支えの知覚」に正、「対処の混乱」に負の標準偏回帰係数が認められた。

Table 2 分析対象者の悩みの内容と援助要請相手の内訳

悩みの内容	援助要請相手						合計
	役割的ヘルパー	複合的ヘルパー	ボランティア的ヘルパー	専門的ヘルパー	その他	不明	
学習面：勉強や成績など	122	5	26	0	1	1	155
心理面：自分の性格など	3	3	9	0	0	0	15
社会面：人間関係など	77	23	184	4	0	3	291
進路面：進路など	50	7	17	0	0	2	76
健康面：身体や健康など	16	0	5	0	0	0	21
その他	7	1	6	0	1	0	15
不明	0	0	1	0	0	0	1
合計	275	39	248	4	2	6	574

注) 援助要請相手の「役割的ヘルパー」は親(保護者)・きょうだい・家族、「複合的ヘルパー」は学校の先生、「ボランティア的ヘルパー」は親しい友だち・先輩後輩、「専門的ヘルパー」はスクールカウンセラー・相談員、である。

Table 3 学習・進路領域のモデルに含まれる変数の記述統計量と単相関係数 (N=231)

	M	SD	悩みの深刻さ	受けた援助	援助の期待一致	問題状況の改善	他者からの支えの知覚	対処の混乱	他者への依存	学習・進路適応感
悩みの深刻さ	2.48	1.12	1.00	-.13*	-.17*	-.17*	-.04n.s.	.17**	.23**	-.06n.s.
受けた援助	82.15	15.58		1.00	.63**	.67**	.69**	-.16*	.10n.s.	.59**
サポートの期待一致	5.55	1.43			1.00	.61**	.63**	-.03n.s.	.21**	.56**
問題状況の改善	18.02	4.00				1.00	.71**	-.22**	.17**	.70**
他者からの支えの知覚	19.32	3.96					1.00	-.23**	.16*	.60**
対処の混乱	9.92	4.05						1.00	.41**	-.06n.s.
他者への依存	12.34	3.37							1.00	.18**
学習・進路適応感	23.83	4.68								1.00

**p < .01, *p < .05, †p < .10

Table 4 心理・身体・社会領域のモデルに含まれる変数の記述統計量と単相関係数 (N=327)

	M	SD	悩みの深刻さ	受けた援助	援助の期待一致	問題状況の改善	他者からの支えの知覚	対処の混乱	他者への依存	心理・社会・身体適応感
悩みの深刻さ	2.86	1.19	1.00	-.02n.s.	-.06n.s.	-.12*	-.06n.s.	.21**	.21**	-.37**
受けた援助	85.35	17.68		1.00	.62**	.65**	.75**	-.26**	.12*	.17**
サポートの期待一致	5.64	1.58			1.00	.62**	.55**	-.16**	.17**	.21**
問題状況の改善	18.07	4.02				1.00	.67**	-.21**	.17**	.31**
他者からの支えの知覚	20.43	4.10					1.00	-.35**	.10n.s.	.27**
対処の混乱	10.26	4.22						1.00	.27**	-.14*
他者への依存	13.10	3.39							1.00	-.17**
心理・社会・身体適応感	30.20	5.00								1.00

**p < .01, *p < .05, †p < .10

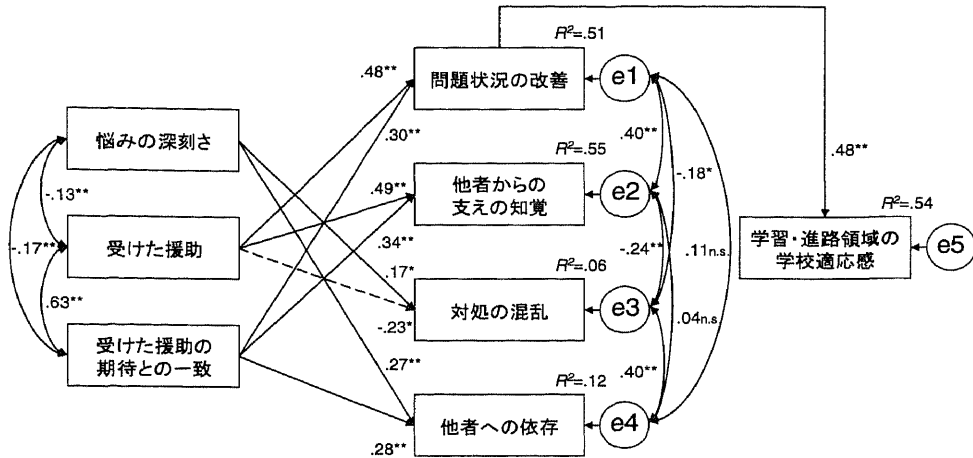


Fig. 1 学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデル ($N=231$)

注) 表中には5%水準で有意なパスのみを表記した。

** $p < .01$, * $p < .05$

「援助の期待との一致」からは「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」, 「他者への依存」に正の標準偏回帰係数があることが明らかになった。さらに, 援助評価の「問題状況の改善」と「他者からの支えの知覚」は「心理・社会・身体領域の学校適応感」との間に正, 「他者への依存」は負の標準偏回帰係数があることが示された (Fig. 2)。

以上の結果を考察する。まず, 悩みの深刻さと援助評価の「対処の混乱」, 「他者への依存」の関連については, 学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデルと同様に考えることができよう。加えて, 悩みが深刻であるほど「問題状況の改善」を認識しづらい可能性が示唆された。次に, 受けた援助と援助評価の関連, および援助の期待との一致と援助評価の関連は学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデルと同様であり, 学習・進路領域の悩みのモデルと同じように考察できよう。最後に, 「心理・社会・身体領域の学校適応感」には悩みの深刻さ, 「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」, 「他者への依存」が関連していた。悩み自体や援助評価が適応と関連するという結果は先行研究と同様である (本田他, 印刷中)。

総合的考察

本研究のまとめ

本研究の目的は, 中学生の悩みの深刻さ, 援助要請時に受けた援助, 受けた援助と期待した援助の一致, 援助評価と適応との関連を検討することであった。

パス解析の結果, 学習・進路領域で悩みを相談した生徒では, 「受けた援助」と「受けた援助と期待との一致」が援助評価の「問題状況の改善」を介して「学習・進路領域の学校適応感」を高めるような間接効果が得られた。また, 心理・社会・身体領域で悩みを相談した生徒では, 「悩みの深刻さ」から「心理・社会・身体領域の学校適応感」への負の直接効果と, 「他者への依存」を介して学校適応感を低めるような間接効果がみられた。さらに, 「受けた援助」と「受けた援助と期待との一致」が「問題状況の改善」, 「他者からの支えの知覚」を介して学校適応感を高めるような間接効果, 「受けた援助と期待との一致」が「他者への依存」を介して学校適応感を低めるような間接効果が確認された。

総合考察

先行研究では援助評価は適応を促進することが示されている (本田他, 印刷中)。しかし, 援助要請時に受けた援助と援助評価のどちらが適応により影響を与えているのかは検討されていなかった。本研究の結果, 援助要請時に受けた援助から学校適応感への直接的な影響は見られず, 援助評価を仲介した間接効果のみが確認された。この結果は, 援助要請時に受けた援助よりも援助評価の方が適応に直接影響を与えていることを示している。

援助要請時に受けた援助のみでなく, 悩みの深刻さや受けた援助と期待との一致という要因も援助評価を介して学校適応に影響を与えることが明らかになった。これらの結果からも, 援助要請行動後の適応について議論する際には仲介要因としての援助評価を検討することが重要であると言えよう。このよ

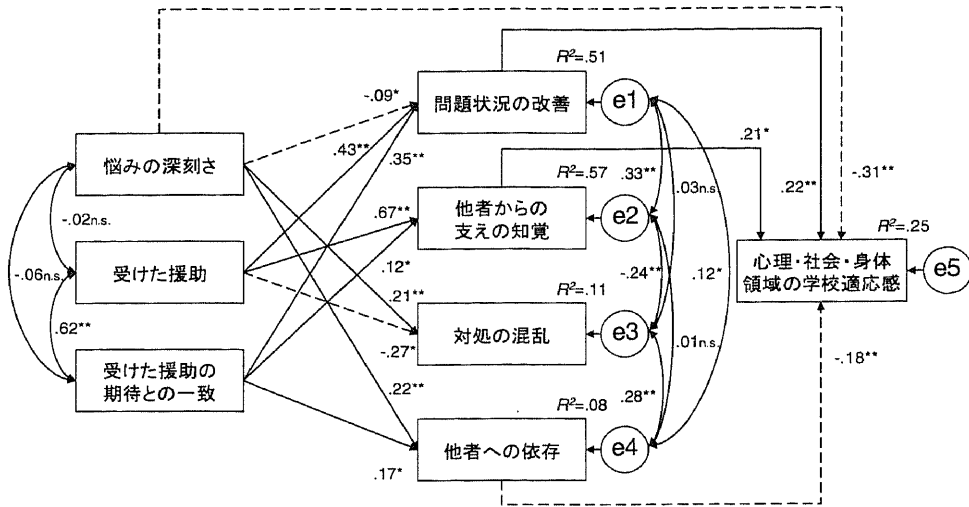


Fig. 2 心理・社会・身体領域の悩みの援助要請後のモデル (N=327)

注) 表中には5%水準で有意なパスのみを表記した。

** $p < .01$, * $p < .05$

うに、本研究で扱っているような日常的な援助が効果的であるかどうかは援助者の要因のみでなく、援助要請者による援助に対する評価の影響も考慮する必要があると言える。

援助評価と適応の関連について、本研究では援助評価は学習・進路領域の学校適応感には「問題状況の改善」のみが影響し、心理・社会・身体領域の学校適応感には「問題状況の改善」、「他者からの支えの知覚」、「他者への依存」が関連していた。本田他(印刷中)の縦断的な研究では、適応の指標の1つにストレス反応が用いられている。これは中学生の内的な適応を測定する尺度であると考えられる。本研究で用いた学校心理学的適応感尺度は外的な適応を測定する尺度である。したがって、「問題状況の改善」と「他者からの支えの知覚」は内的・外的適応を促進し、「他者への依存」は内的・外的適応を阻害する可能性がある。

実践への提言

本研究の結果から得られた知見を実践に生かす方法について2点述べる。第1に、学習・進路領域の悩みを相談した生徒に対しては、援助要請者が期待している援助を提供し、生徒の問題状況を整理するように関与することが有効である。生徒が「他者から支えられている」と認知することよりも「問題状況が改善した」と認知した方が学習・進路領域の適応感の向上につながるため、情緒的サポートのみでなく、現実場面での具体的な問題を乗り越えるための道具的サポートや情動的サポート、評価的サポート

も多く用いると良いと思われる。しかし、そのような学習・進路領域の適応感を高める援助を行うことで生徒は「依存しすぎた・頼りすぎた」と思う可能性がある。このような援助評価は内的な適応を低めるため(本田他, 印刷中)、この点に配慮しながら援助する姿勢が求められる。第2に、心理・社会・身体領域の悩みを相談した生徒は、悩みが深刻であるほど学校適応が低くなる可能性がある。それと同時に、援助を受けることによって問題状況が改善し、他者から情緒的に支えられていると認知することで適応感が高まると推察される。したがって、心理・社会・身体領域で悩みを抱えている生徒に対してはある程度積極的に援助する方が適応感の向上にとっては有効であると考えられる。

本研究の限界と課題

本研究の限界と課題として以下の3点が挙げられる。第1に、本研究では回顧法による質問紙調査を行った。援助評価が適応に与える影響をより厳密に検討するためには、本田他(印刷中)にならない、縦断的な検討が求められる。第2に、本研究で用いた学習・進路領域の悩みの援助要請後のモデルに含まれる対象者の多くは役割的ヘルパーに援助要請し、心理・社会・身体領域の悩みの援助要請後のモデルに含まれる対象者の多くはボランティア的ヘルパーに援助を求めている。したがって、これらのモデルの分析の結果には援助要請相手の要因が影響している可能性がある。今後は援助要請の相手ごとに援助評価が適応に与える影響を検討する必要がある。第

3に、「受けた援助の期待との一致」が援助評価の「他者への依存」と正の関連を示す結果が2つのモデルの双方で見られた。この結果は、期待した援助を受けることによる不適応的な影響を示唆している。今後、援助評価の「他者への依存」に関してさらに詳細な議論が望まれる。

引用文献

- 橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版.
- Honda, M., Arai, K. & Ishikuma, T. 2006 The investigation of the factor structure model for a Japanese version of the Scale for Evaluations of Help for junior high school students. *International Congress of Psychotherapy in Japan and The Third International Conference of Asian Federation for Psychotherapy*, 102.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2006a). 中学生の援助に対する評価尺度 (援助評価尺度) の作成 (1) - 探索的因子分析と被援助後の感情との関連の検討 - 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 241.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2006b). 中学生の援助に対する評価尺度 (援助評価尺度) の作成 (2) - 自己効力感・自尊感情との関連の検討 - 日本学校心理学会第8回大会発表論文集, 15.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (印刷中). 中学生の悩みの経験, 援助要請行動, 援助評価が学校適応に与える影響 学校心理学研究.
- House, J.S. (1981). *Work stress and social support*. Reading; Addison-Wesley.
- 石隈利紀 (1999). 学校心理学 誠信書房
- 石隈利紀・小野瀬雅人 (1997). スクールカウンセラーに求められる役割に関する 学校心理学的研究: 子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査の結果より 平成6年度~平成8年度科学研究費補助金 (基盤研究(c)(2)) 研究成果報告書06610095
- Lieberman, M.A. & Mullan, J.T. (1978). Dose help help? The adaptive consequences of obtaining help from professionals and social networks. *American Journal of Community Psychology*, 6, 499-517.
- Millman, E.J. (2001). The mental health and biosocial context of help-seeking in longitudinal perspective: the midtown longitudinal study, 1954 to 1974. *American Journal of Orthopsychiatry*, 71, 450-456.
- 水野治久 (2007). 中学生が援助を求める時の意識・態度に応じた援助サービスシステムの開発 平成16年度~18年度科学研究費補助金 (基盤研究(c)(1)) 研究成果報告書16530423
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 尾見康博 (2002). ソーシャル・サポートの提供者と受領者の間の知覚の一致に関する研究 - 受領者が中学生で提供者が母親の場合 - 教育心理学研究, 50, 73-80.
- Rickwood, D.J. (1995). The effectiveness of seeking help for coping with personal problems in late adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, 24, 685-703.
- Srebnik, D., Cause, A.M. & Baydar, N. (1996). Help-seeking pathways for children and Adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 4, 210-220.
- Trusty, J. & Harris, M.B.C. (1999). Lost talent: predictors of the stability of educational expectations across adolescence. *Journal of Adolescent Research*, 14, 359-382.

(受稿3月21日: 受理5月7日)

Appendix 1 援助評価尺度

(Honda, Arai & Ishikuma, 2006；本田・新井・石隈, 2006a, 2006b)

項目
問題状況の改善
自分の気持ちの入れかえができた
悩みが小さくなった
どうすればいいかがはっきりした
悩んだときには自分はこうすればいいというやり方が分かった
なぜうまくいかなかったのかが分かった
自分の考えとは違ういろいろな考えに気づいた
対処の混乱
自分の意見が消されてしまった
自分がどうすればいいか余計に分からなくなった
ばかにされたと思った
他の人の意見にふりまわされた
うらぎられたと思った
相談する前よりももっと悩んだ
他者からの支えの知覚
自分のことを分かってくれる人がいると思った
自分にはいい相談相手がいると思った
自分は一人じゃないんだと思った
一人で悩まなくてもいいんだと思った
自分の味方をしてくれる人がいると思った
悩むことはだれにでもあると思った
他者への依存
自分が他の人に頼りすぎていると思った
自分が何もかも悪いと思った
相談した相手に迷惑をかけたと思った
自分が甘えていると思った
自分にはできないことがたくさんあると思った